

レタリケレ共重キ慎ト云恐シサニ、此馬ヲバ泰親ニゾ給ヒケル、昔天智天皇元年壬戌四月ニ、寮ノ御馬ノ尾ニ鼠巢ヲ造リ、子ヲ生ケリ、御占アリ、重キ慎ト申ケリ、サレバニヤ世ノ騷モ不斜、御門モ程ナク隠サセ給ヒニケリ、日本紀ニ見エタリ、異國ニハ前漢ノ成帝ノ御宇、建治三年九月ニ、長安城ノ南ニ木アリ、鼠彼末ニ登テ巢ヲクヒ子ヲ生キ、サレバニヤ成帝程ナク亡給ニケリ、思寄ラザル處ニ鼠ノ巢ヲ食、子生事ハ、其家ノ可亡怪異也。

〔大和本草<sup>十六</sup>〕鼠<sup>○中</sup> 鼠ノ鬚ヲ筆トス、ツヨシ、

〔明良洪範<sup>四</sup>〕寛文八年ノ大火ニ、御本丸近キ大殿共焼ル、餘炎御守殿ニ移リ、大奥モ焼ナントス、御臺所<sup>○徳川</sup>家網妻ハ常ニ鼠ヲ嫌ハセ給ヒテ、天井上ヘアザミヲ積置セラレシニ、夫ヘ火移ケレバ、防ガント思ヘド、階子無ケレバ、<sup>○下</sup>略

〔嬉遊笑覽<sup>十二</sup>〕鼠のよめ入といふ事、樂師通夜物語<sup>寛永廿年の饑</sup>の時の雙紙いにしへは鼠のよめ入とて、果報の物と世にいはれ云々、白鼠野鼠、小鼠、廿日ねすみ、こねら、おねら、おねの子産屋の内の赤鼠に至る迄皆是飢饉に及申云々、こねらは子鼠、おねらは雌の子鼠か、狂歌咄<sup>五</sup>古き歌に、よめの子のこねらはいかになりぬらんあなうつくしとおもほゆるかな、物類稱呼に、鼠關西にてよめ、又嫁が君上野にて夜のもの、又よめ、又おふく、又むすめなどいふ、東國にもよめと呼所多し、<sup>○中</sup>と云り、此名あるより鼠の嫁入といふ諺は出さしなるべし、又鼠を夜の物、狐を夜のとのといふ、似たる名なり、おもふに狐の嫁入は鼠の後なるべし、

〔世事百談〕鼠のよめ入り

ふるき繪冊子に、鼠のよめ入りといふことをつくりしものあり、今も猶錦繪などにのこりて、たまたま見ることあり、こは鼠の異名を嫁とも嫁の君ともいへるより、作意したるものとおもはれたり、古歌に、